岷江入楚

夢游橋

第五十三

特別
へ 12
4604
53

712
4664
53

京都帝国大学図書

夢浮橋

[illegible]六歳　大将花[illegible]四歳の春[illegible]

私事ハ童[illegible]七歳[illegible]春之比奏[illegible]

私ハ[illegible]の春ハ大七歳乃六月[illegible]

比叡の未[illegible]

[illegible]大将未横川封面僧都物語事

大将問仰せ[illegible]僧都和歌[illegible]

大将欲[illegible]小野[illegible]僧都[illegible]

常陸し子童為大将御共僧都賜文[illegible]

大将西京又し白彼童令[illegible]文を小野事

先是七朝日僧都[illegible]小野事

童見未始老[illegible]大将[illegible]御入事

始天[illegible]童[illegible]帰京事

小汀文庫

48 3722

夢浮橋　一名法師

此物語の巻々の名桐壺よりはしめていてたる巻ハ或詞乃字をとりてなつけ或哥の心をとりて号ありしかるに此巻ハ夢浮橋と詞にある事もなくまた哥にもなし古来の不審也夢のうき橋とつけたる事もなし[illegible]夢の[illegible]浮橋とある哥よりつきていへるん或説云薄雲に大将乃文をみるまてもなくて返し[illegible]夢とい[illegible]事[illegible]文大将乃[illegible]山に[illegible]あるよしの[illegible]さるかたに夢とい[illegible]此巻[illegible]かれこれ[illegible]みえ[illegible]の[illegible]紙の香[illegible]の[illegible]と[illegible]此物語の[illegible]さし[illegible]言[illegible]無常迅速のことわりをあらはし[illegible]生前[illegible]裏乃趣をしらしめんかためにして此乃名目をあらはすによりてつゐに夢と[illegible]はいふ[illegible]

ぜんを乃ち法ゆ[illegible]
涅槃経ゆ生死無常猶如昨夢と説たり四芝経ゆ
如来出世難如優曇華と説たり涅槃経に如昨夢善男子如
昨夢故當知生死及与涅槃無起無滅無来無去唯
識論も未得真覚常如夢中故佛說解生死
長夜とあり内外の経書ゆ計夢よりつきて内外共に
あり玉ゆ[illegible]と西あり[illegible]
時畢竟夢中説夢西童唐とあるも計なりや故ゆ法華
とゆふ仲特諾仲特毋尊天法橋のとりて共乃
史婦[illegible]
やうに男女のりゆ[illegible]例国と生ち我国の法
移[illegible]法と易る故も三百篇の中も用雎麟趾
乃化ち韓[illegible]農の法よりて計夫婦乃道
として国君の風をれへ[illegible]雎陽万物を生ずるれせ
詩序云用雎后妃ゆ德や風し始や而以風化天下型
夫婦要故用ゆ歸人要故用ゆ邦國正要故用ゆ

法橋ハ生死乃かうり煩悩乃根元や愛とゆ世間出世乃法
皆如幻夢なりとゆふ[illegible]世乃煩悩即菩提生死
即涅槃の義ハ[illegible]
[illegible]
正法通の之説あり流通分より[illegible]常
遍の義や[illegible]
別して一巻の名也[illegible]一部乃号なり[illegible]
[illegible]
法の師とゆふつきん真ハ物[illegible]
巻の数と共七位よりつきて[illegible]
[illegible]
計巻名師説なり[illegible]又八恩寺加国也[illegible]化身と来
[illegible]実の義ハ義は一字の[illegible]
夢よりハ[illegible]
[illegible]
[illegible]

別の書物にて実説の事のうきをしりそこなしてそれと同じく示給ひ給ふ
はかりにてうきをよろこぶ荘子寓言に一日を
百年とは荘周が胡蝶化して夢をみるがごとし
物化は習ひ也且有大覚而後知其大夢也
漢家の寓言に百年乃覚と化して和国の寓言に
如乃覚よりかすかなり華厳経に一切仏及与我心皆
悉如夢と説き古人云生死涅槃如昨夢天堂地獄
道遥自在文荘子齊物論方其夢也不知其夢也覚
し中又占其夢覚而後知其夢也且有大覚而後
知此其大夢也而愚者自以為覚故竊竊然知之君乎
牧乎固哉丘也与汝皆夢予謂汝夢是其言也其名
為弔詭万世之後而一遇大聖知其解者是旦暮遇
之也荀有荘周夢為胡蝶胡蝶相之然胡蝶也自喻適志与不
知周也俄然覚則蘧蘧然周也不知周之夢為胡蝶与
胡蝶之夢為周与周与胡蝶則必有分矣此之謂物化

右注の所
注のごとくなるをもつてかくのごとくなるを
和歌大和の詞也　E所海分注し
E巻名は詞也とさるべし一部の名目は
ほ句より料簡すべしまたまたとりわけ格は古今
の初より世中に変のごとくとりわけ字格のとりあつかひ
俗格をつけられのる細所海物よりいまだ遠なくお
ものおもしろもろうん変化化
恵の心をもつてんとやをりんと俗丹のまをを
らう変まてのものみしくらう
E巻恵寸七巻の内巻巻は東に恵化と
外伝
巻名所物よりくを経変の事所余おすべし金剛四巻
称讃巻名事化変ちうを格より別の名所世
中八の巻ちうおこしるも又天俗格の心とかんより原文

五十二帖を号する事一説に義云ふ紫式部一生の
業なりと云ふ或は清輔よりてこれを奥し
てゆきて又は常陸よりてこれを奥し
ようつる事疑なしとかやとあり方をあけ時
こそは小野よりなれ其点茂のこと其意任を
望て遠ざかるとも及ばぬ事なれば
つ寄しそあるべき似たる品々の名はれ
ばして八一紙の紙数の心茂けこと品号一部の名
よりあるべし文世間の万物茂や
源氏書清輝よりはんてうとしてこれを
事也茂は代文小説こと光源氏ちんよ随て後つくん
茂こと恒つる事非部編茂事
天台よりは法華を廃世如大夢一
在同胡蝶事
以上寿花
秘
蓋世七宝の智巻乃未ハ月色まそのの事也

巻八ハ此末乃茂や
巻名事ハ物語よりこれを
別して八一巻の名也
品巻よりこれを
八清輝奥よりこれ常陸
ふるこれこれの宮信
もこれこれの小野
あるこれとこれ
これ源氏茂の一生
一生八品巻よりこれ
あるこれこれを作るや
光号よりこれ
荘子の筆法
とこれこれ
ふるこれ
ふるこれ
や品茂源氏物語茂といい

茂ハ此末乃茂や
巻名事ハ物語よりこれを
別して八一巻の名也
品巻よりこれを
八清輝奥よりこれ常陸
ふるこれこれの宮信
もこれこれの小野
あるこれとこれ
これ源氏茂の一生
一生八品巻よりこれ
あるこれこれを作るや
光号よりこれ
荘子の筆法
とこれこれ
ふるこれ
ふるこれ
や品茂源氏物語茂といい

うしうる名なり文橋ハ紅(?)にもあらさ水のうへにも名とあるれ
心わかりとりうてゐるハけ作りりや竟ハ甚深なる告(?)字
此巻ハとりあさ斎物論をとりうてゐりや 斎物
論ハしらしめに南郭子綦隠几形如槁木とこへふ事
ありあとして胡蝶の夢のりそれうきとあくりけ物語
ハこの習巻の末のよ比へうくらら本ゐるのやうりて合すれ
ら遠くやもあんとうきて此巻のそ前のりりも八ハと
さうにちかゆ事をたくあやしういふりける夢すると
の意もえすゐらんとういふ作る胡蝶の夢やり聞とあるれ
此巻とよるよ符合ありりや玄妙乃事也

此巻上 秘

夢浮橋 別名法師(のりし) 此事ハ相並巻ニ一名華前載(?)
とありて巻軸ことも合ゐるや
此名別しては此巻乃名 題しては一部乃名也
秘ノ義ニ同し
手習巻一生乃ある夢乃ことくゐる事 秘ニ同し

此物語帝皇四代年紀七十年之間のことをあらハしたる
んへと文夢やうと深氏式部乃五巻をとりり荘子乃世ニちそ
らまいしも文とそれそし
浮橋の二字此よりも逍遥遊斉物論事 秘ニ同し
川前世中ハ夢のうちうちれ浮橋りし 流義ニ同し
相里(?)説王乃十夢此事をとり一流あるにいふうわりゐ也
用へしるも
とよ注釈の内彼周易ハ不とよもいく朱をとりく合
説也
御説六夢のるをいへる所よ注し也
列子上 周穆王第三
覺有八徵夢有六候奚謂八徵一曰故二曰為三曰得四曰
喪五曰哀六曰樂七曰生八曰死此者八徵形所接 八徵往畧而不載之
奚謂六候一曰正夢二曰蘁夢三曰思夢四曰寤夢五曰喜
夢六曰懼夢此六者神所交也 注六候之夢与周禮
同 人心之中虚靈知覺事有兆眹見於夢爲正夢

先兆し夢也 蓋者夢中驚霊而覚者也 思者因所思
而成夢也 寤者夢時見覚時也 喜者因有所喜而夢
也 懼者因有所憂懼而夢也 懼与霊不同用也 注中却
無分別此皆在我心神為也 皆神所交也 交者交於
外境界也
是同礼記より出たる而随引得勘載しる
正夢物に感動せるを示しるてみる夢也 孔子門弟子
夢まる数やこと

霊夢 傳説の事なとをること
叶和尚の明石入道の夢なとをること
思夢 事の寝の夢は心
夢上は夢にて六条は長尺の年七のうちにもあると
あれはくくに見えるとなること
寝夢 うはの時は事をみる也
平生のこと事あるしるとみる夢也これは叶和尚一部の

作相あること
喜夢 うれしきのあること
叶和尚道生巻の夢なと
夢に来摘乃に及ぶ
懼夢 おそれあること事あること夢也
原氏 江戸浦へうつる
桐つかの門は朱雀院とのこと注に夢なと
案し叶巻にて夢のやうなるとなること
是六夢を心よりて一つとして芭蕉よりつてかき
うちうん夢のとなるもとをりとと
私叶記 天正二年二月八日 叶一部 海浜路し時
関書合あること 叶和尚 叶和尚として安倍
了簡とこと 芭蕉ノ夢也

山よおそしてきいとさ防治やうと絶仏ふと名うきを
くもうへ
何地獄山
花月乃八日山れ仲堂りて善乃経仏信巻し治事を
ゑ羽巻をうもみえてう
秘堂中堂へすいり治てう小野よ行治つきうるさ
乃わるあせ
巻羽巻のつきを
こしうろけいのりるとつけうこい
治
堂れ年比の羽れ仲りと傍都乃事付うう極
一京文乃恩ちれを
秘一文乃畑のけれ年ゑ羽巻よ尺えてう
すこし治つるぐん
何験
秘僧都乃心や

りてさいき
僧都のけいめいもるも
とのゝうちよりたゝ語へなやうりや作る
何 小野往生伝 ロクリ 遊仙窟
筆 意の僧都よりい語初やや
しゝ作り
秘 僧都の心意や
とやりなるかよりん
秘 りのてゝるゝ寸人ゝ〻〻きかとも
京ゝゝゝ〻〻〻〻すゝも作るぬうちよ
手 けゝ〻〻しゝき栖もゝ〻〻文山ゝゝ〻〻世ゝゝの初
ゝのゝゝゝはゝゝちゝゝきけちのすゝゝ〻〻〻〻
秘 意の初久方のゝゝい語〻〻〻や柴のすゝ語し
ゝゝゝるゝたや
筆 久方めゝい語〻〻小野の色とゝゝゝの生ゝゝん
もゝゝ〻〻ゝゝゝゝ

いとゝさゝる心ちゝ作り
又意の初法定ゝゝゝ心ちゝゝゝ
かゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
筆 小野ゝ法ゝゝゝゝゝゝゝゝ
たゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
法定ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
何 法用モラレキ王
ゝてゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
法ゝの僧都の子ゝゝゝゝ受戒ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
秘 意ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
秘 ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
筆 意ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

僧都保永の御ものさびを言あるやうなるけしの
僧都の心中や
かゝるゝ〳〵ふぐくしかるまきる人はこれ
恋の性なるゝをいふやうなる弱〳〵と僧都乃
心へや
もちまはるゝをやりしてまぎ
法師の役をいつのるゝあるゝを恋しかゝ聊
よ公家をせゝんと僧都のと思るあるや
いゝ人すてんやうゝるまいさる
僧都の出師して遁養のやうを以と心来をん
ゝるゝや
たしゝうをきて給なるゝ
恋より遁養の来乃様や
中〳〵ゝるゝいゝさんよ
法よりすてていゝるゝや
ゝゝゝ見えて清

ゝゝゝゝ背や心来をめゝて只有のきり中
さんと思ゝるゝや
いゝかゝる事より伝りゝん
恋より僧都北遁養
あやゝゝ思ゝるゝ人乃此事りやそ
保永のゝを連ゝゝ富ゝ
はゝの尼乃ゝゝけにゝゝのおゝりて
老れ老病や 一云ゝれん
別ゝ乃ゝ来ゝゝ
老氣ゝゝ
ゝゝあやゝゝき事ゝを
ゝ信院ゝ保永を尼つけゝはの事や
おゝのゝゝゝゝを尼ゝゝきてゝわゝゝけゝ
消ゝゝ家ゝゝゝゝゝゝゝゝ
僧都の母ゝ事や
僧都乃妹の尼君はゝゝゝ

[illegible]なりて[illegible]奇[illegible]

秘 後赤の事

多くのことさうもきんのくちの

何定変々云うつかの如沒せ三ノ下動

[illegible]この八殯殿や天雅房薨遊乃後下熙姫天[illegible]

喪屋とつくりて殯ストいつる或ミりや

續日本紀云大宝二年十二月辛酉月殯南殿太上宮持統崩

なとあり或又魂殿[illegible]以礼記[illegible]殯宮といつる聖

徳太子令入定法所と変敬といつるもの

仁寿年若日后高祖事[illegible]といつる彼后の山陵と数百年の

後赤眉乃黨乃宝[illegible]

形美葉[illegible]如有の赤眉の黨光[illegible]

[illegible]後漢書[illegible]唐士[illegible]死人の口[illegible]

[illegible]そうもの迷ハ[illegible]年と返迷[illegible]形骸不朽壊[illegible]

朋[illegible]上百帝前御[illegible]

上何為 秘下用[illegible]

魂殿ハ山陵ハ作ルを以て後漢書呂太后の山陵をかなる

く赤眉の黨の犯しかるもと何為ハ法ハ乃法ハ[illegible]

[illegible]なる[illegible]

[illegible]乃死[illegible]

[illegible]

[illegible]

何為ハ法いつる[illegible]

入棺[illegible]の廣仕

宇佐のみ[illegible]

[illegible]

秘 花[illegible]

棺[illegible]

宇佐稚子の事 花[illegible]

魂殿[illegible]

動[illegible]宇佐稚子事[illegible]

何為法不用

かくもいきよりいるるねと
僧都乃あれたをしくふけておしるねとくらいの死て
むかしくるさんもをこうてあるてあるつるしとを
念仏をおこらてしを　河弥池徒
一心不乱
てんくうこうあやうのあれあるさむきのそくそまろ
天狗　欺将　アザムキヰテ
黄帝伐蚩尤　時以正月十五日伐斬之其首青上焉
天狗其身伏而成地霊　辛朝月令　以月河
天狗とふた星の名や　不朝より用ふる天魔の類
よいてう
京よりそくそまつりそし
京といふ不寒小野のをいくん
三月ていりいるきんくそて
僧都の尺つけらい三月の末ゆまてよ秋よりて
とあるもいに六六のこケ月いるきんのくるあしるを

こつきりうりや　私何ノ故不用ふ
三月訓ん音ん但ゆまていくるりたの作るもし
ふをを習ふせるいふ三月のりやは丹巻よ無ふて文
ケ月つらをりけるむしろんとあるん三月あ白ん
大わい卯月乃十日とるんさるけるとあるを又僧
都羽石中文よけ三月ようう老て作るあの死あり
てをつをよまうて作しけやをとくらりあた
又むをこの紀伊ちい空ふをよあいてし死文れを一不
いとくせうと結よきけれおをとを思いくをくそ
まつり結てりけるとこれの表又を結よけをを
いてりを三月よ方をあるもんとをしを尺つけるを
勿論せのの月北中いるるんのやうるといりんを
三宿あるをしを又を習巻よをりいあつるかとり
に六月とをねとあるに月文月を又をりるをつきんを
変を元いさたの三月よをりるをいてをを作へをつき
いりたんのやうそそを波一五月をををるねを波

四ケ月ありけるを又三月中に死人のやうにて正月又
月の狂ひ狂ふこゝいけるうさうもうるさ月まで狂
ゐをけるを僧都のいはくやあまりや三月ちう
四ケ月に六月七月のなかあるをつゐをこゝろにて後
よ秋よりゆきに京のけがいあれるをつ田の後
ゐるをそといりん付ゐをもけよや又奪の中わるしあ
ゆかんとうをてうこゝろにて又のこい月十二月小雪ゐ
ゐついてよ来ればうとをみえこゝうれを引きゐく
をこゝしごゐの初をきを心を
花忘れんの者れ小ゐ
僧都妹小野尼や
かれさうとよこうゐ知ゐ作ゐくごゝん
いゐの色公僧都ゐ百の山籠れ時西坂ゐまで下ゐ
きけるまを三ゐて
護身ゴシン
狂ゐれらゐしごゐけるゐ

可霊又領しゐる物ゐ乗や
ゐことよ正をせゐしてまゐてまゐてしに付
出家や秘ありのまゐにゐや
ゐゐしゐすへまゐまをは
芸能者和の人ゐはいって仏竜ちんを
とゐゐて作りつゐよゐん
ゐゐしき事ゐれを知ゐをさゐかゐゐれと知ゐ
きこしゐをてゐゐゐしきゐもゐれをゐ付をきつゐし
ゐをや
さて、これゐゐれをかのゐゐて
芸の心ゐ身ゐりて作定ゐ結ゐ
私ゐゐ字身と仏竜ゐゐゐれゐゐまれ作知よ
ゐ問結ゐまをゐれと一定と弥ゐ定ていきゐあゐや
ゐ弥心ゐするゐや
愛の心ゐて秘出ゐて始て愛の字ゐ
愛の始や必定字身を定てゐ定三愛の心ゐ

かくれ忍ぶべき事のみと
慈の心よりはさぬを僧都よつけしや
かくありける事と出世よわすれ人とおもしやうよおもしろ
秘 僧都れ心や慈の周章をあやしと云也
私慈の思ひあまり給ひしさぬをとて懐切なる事と僧
都の云たまへ人とおもしやうすとれ出家しつる
人ハ男女のむつひをまじはりなく成るとおもし
人のやうよ慈の云ひ給ひんとや

あやまりしたる心ちして
餘 僧都のかるあやまちと出家のゆへと云ふや

されは世れちきりや
餘 藥の不感りそれのけよ頌ちし思しけるも僧都よ
似合たる詞や 藥師経よとけるりや藥病鬼病の大
病あり 藥病ハ不藥を感する病也 鬼病ハ物のけ
狐天狗なとよ領せらるゝ也 大病ハ地水火風の
おこりたる風寒暑湿よよりおこる病也 前よ藥師

のゆゑとて其心ひとしくあけつりけ出家と鬼病よ
して又藥病なるへし

たかき家のすゑなれ
族姓無つきんよしれと出家のゆゑと云也
かなしうらんとそれがしもいみつき
何 生王家無等倫 八十二子孫 同紀王之子孫也
秘 慈乃恩恭や
餘 上説トいふつきまやあらんとそ 真実なるの給ハねと
なさと折りかしますれ
思ひかとめてえうるへまおあしそもそのおりしてそれ
めしとしとしつねやうよのゆふ也 慈の詞

おちあまるつきさはらい
ことしさくれハ人のおあるはと又くやうよおろしき
ひありんおきれハ云給ハさりしとや 秘 出家のゆゑや
律尺ろそてよつまとぶれそ
出家の出家れゆや

いと心やすくうちうちにはなりゆくこと

業平　業平は出家のすがたにて心ゆくしに　僧都乃恐怖

うちとけんとてくるのなりけり

法師もうちもうらく

業平のうちのいろやうは物ふかくよ母もうちもうちとも

月ゆうゆうあはれいろいろやうの

小野殿人よりもとしとしのふかさよりうへとも

業平乃母ゆゑ

なるひとうてうつくしいりあふと

業平　はるかとおもふ母のふ野へうるゆりんも

いとびんなりきうへとは

僧都の似合ゆゑ

業平のやうるうもう

業平乃母二業

かうちとうへ世とうむき

僧都の心や

あやうく心いうもねも

業平　法師の心や

つきえねつきもき

業平の前ゆとしいちの法くふいうあんも　出家乃

波いいよくつもりうきさもをうへや

まうのかりん寺ちのわそふさうり伝

僧都　の色者や

月くうちての狂よ

末月とゆん　陳法牙れ東西とやさんとや

いと心ちとふけもと

業平乃心すうちとの思法心

かれたちのうくれうそわそおちくうり

業平乃　羽巻ようちうん業のわれをそんといしく人心

法師　の井や

とくくくもとりいくうちときうけるも

常陸うみうもの中うちうちくもも

なみんのちるさゆかり
(篡)僧正の本とへの給ハねん意重と云也慈の組
ふれどかりしりのちん
付慈を使ハやらんとや
此段三一くそう給へ
(篡)僧都の文を給へ(小野)への返りへよちんとや
あかりしこれ思ふかそうあり寸つまえ侍らん
付事しれ思ふ人をちは破戒ようらんとも僧都の組也
ことのありさ毎へかりしくこりや侍
なのりハありのせくにふろりや何らぶしかもりハ慈の三つゝ
おもしてそもくそしく給へとありのまゝよりや
うらろひ給て
(秘)慈なり
つまえねつきえるへとふるかし給らんとえ
(篡)慈の組僧正の出家し戒かと受くる人を破るやと
ふつかふふとや

うちはがくのかうられ
(河)僧形へ
慈の利かへとのかよや
おもふ心さしふかく侍るを
出家乃素懐あるや
三条の文の心かれけりそ
(秘)女三文や
しれらしけるさし召由と川を
(篡)慈乃利身れもとのかよや
とのりうく侍ふとい人事しもうつくかりて
(平)宮位をしぬく發心とさ毎くけらるゝと歎給ふ詩
侍や
又えたるねすを
世間ようつうまうくなハ寛きる事也
かくけのせいし給ふハ
(篡)慈の身よかる所ハ禁戒をしを何とや

よいとかしきおやのおもい事とぞ
母乃心をわかれて心蓋の姉分のかたらる事なと
いりりや
ふかしきよの心なると
若公の涼きるや
僧都もけなとるなつきて
僧都蓋の心中を領納していよく仏法をいさ
めしや
中なかりもいとよかりねつけすと
蓋の心小野のまや
うへのかり花をのしらんれ
後来定なる心や
宝うきてとり坊行
秘 僧都の文や
蓋の姉分あるね所にいそさらいそて僧都の文読ちし
くる心をおりしれ

こきしい山よおもして
僧都乃はしつよりみ新也
よくろなるやうよおかそすしき
秘 ほ兼をとちの消るよもしおよてそ結せしとも
弄 良智の弁れ量よ僧都のかたりを君をとして結
いはや
この子は心とえるよ○と
量は何る日こそ思ひよるねこし文ゆきて世文まゐるる
やうりは あかをすしなとの結すうそに
さかりよなし迄は作せんの人にすらし立わかれて
西坂下や あかれ分散何小野への中ろを思しやかに
志まりし事家のへ山よむかひて
何 只青葉山や非石而 見八雲御抄 勅付若葉巻し
秘 石不よあつそ夜木立なるへし 蓋
弄 非石而石而りは若使とてはよあて
何大 りとらよる秋ははよまる比る乃ふかきは山のいろ付を忖

居士の作ありけるとむかしおかゆる
法華乃花信道の営とふるよるふへし
思ひのあるにまかせてや脈谷の行燈ら
秘 谷よあかりてみえる行燈や
箋 中ねの朱ちかしみんやちかし行きや
私言 まなけるあやしき谷乃人家の稀に住阿隔なとる
されはこそ
行 谷の行燈不寝あかるにより 谷のさびしさとふかし
なれもありし京も谷の行燈又は谷の灯や行も家の
ちかしや谷のつらいふ谷りかへるを見つけてはなし
そのうも仰せ拙や 山あいなとより見ゆる所と谷乃端
といふるん夕無方巻よいさくしの行とあり自巻まて
ちかうなる行とあり前文同風情や 一説云たちかう
なる谷の行とよあかりてそらみゆる心又ものも乃
極楽なといふも行よ木ともつらすかるけれとこ
ちかしきもの也や

河海よ二の舟をたし待ちをえて京まぞるよ谷の行
えいは只谷よあかる家の行燈なるへしむかい乃山
をくらる人の行燈をつ見よりみゆるといへるとかい
待へるなるや
私 花鳥ノ筆 秘 箋 同し 乞也
おかりとしるる火の花をなまし打光
箋 菫乃下山乃す女や
のこるかるね花とあへの多ミいやふるよ見ゆるや
私 のとるすねらは松明のあまりしてわとさむをりて
かとする所也 蓮花稀らふ来る松さし寺なとあれ
やむをえりたまいりうる火の影といへるは川のうち影とあ
ちしきるとてやすら後ゆへよ 鋼火のわけれむすめり
よめるや 其方はちかうなる也 されとも舟のやかしい
うらみゆへよむもかなりや
しるわすみよ川かはしてまつるにかけあかるゆる 大和殿の説也
秘 川かはしあ常也 箋 あかしとは修都の所也 秘 是宗乃詞也

いとこの母とをく
　恋のゆくへとさうこそとゝふる心　法華の心
きとうさうやあらん
　法華の心よさとあるらとゝふ心
かくらいちらけかさき時いとさうるあてせう
秘　法華の心やうつけよ心随分の初とゝふるあてせう
　もしくは心
　宇治　恋のおもてしの心
むしのゝなくゝゝうるすゝしぬると
　法華の者とゝふる三世ゆるすをつうる心よ憑ものを
あらう仏とゝふるまさうして
　法華の会佛よまさうふす心　西白初心
ちゝよかりゝの人のうらん
秘　うれさ夜なり
かの殿いこれみとやそ御ゝと
　恋の付ゝ　さるゝ刈せうの壹をやりんとそうまれと

法華はゝ人ゝ思ゝんとゝふるうまわるゝ心　西白
ふゝ
まうゝ白ゝとさうゝゝん
　翌日ゝさと壹をゝ小童ゝつうゝ心
つゝよつゝりゝ随分
　宇治　つゝりゝ事をふよるえうう
人きうねまにのゝ也治ゝ　秘　常陸ゝ子也
　恋ハ童とゝ
あこうせゝいりゝとのゝふゝ
　吾子　日本紀　女ハ婦とゝいゝ男をハ夫とゝ
せうとゝゝ
秘　法華のゝ心婦ゝ
　恋の初心　美義
ゝうゝまうゝゝうよゝふ
　法華の母よゝやゝゝをゝゝゝゝさいきて事
いゝくゝゝりんと壹ゝ恋ハ口ゝゝ結や

御恩

なのあやれ佐おりいり。
母れ心のほとおしさたにれく〳〵〇つかひもふ定まる事をえ
きらせしとせ
おさなきころちりしけるは[?]まゝ達と
童乃心て兄弟おかまはしと浮舟ハ八丈乃れ女かま達えるに
ちれはしはしうるるかし
をうあやうふ
(弄)悩乃おつま達ありくらとしてま
こゝうじまきあふ心おかけ給り
(花)おとは唯やいぬる都や僧のまろうゝしょをもわる
我よいてへるや
かしこうはまろいつとめて僧都乃れりとよわ
(箋)僧都より盟翔して使乃あるさ夜て小野にて
よ色大おとのくれ使ぞて小君やまうてあくりし
(弄)小君や
(私)丈の細や
僧都ハ消るのへさまれ使つかへきりんとふるし
えりてハよく〳〵佑て
(何)臆
私迷悲せしかなるへし

浮舟よきこえ給へ
(箋)浮舟や
茅ふわせうしてさふらふへしとうきあくり
薫てもかふあきていと悔いるとおろし事なるへし尼君へ
乃文まゐるへし
これに何事れと
尼君乃まとろさしるこをとりせ
こまうへりてまうりて
心うね[?]まうに浮舟君の尼もるせ
ありそらわかめてりのきこえしのあるうやと
浮舟君のさ夜て人々に志て迷わると心ならしきせ
抽ぐし志けるを
尼君よ仕かとかくしつるなり
在乃詩笹よ
(箋)事乃さ夜を志てゐるへしとつ尼君乃絹せ事扎らしをあをね
まなりしそつ尼君のおとろきあわてゝしるさ夜也

山ちかきのにさくらいとうつくしうさくこと
僧都　言葉の文をとりちらす小弟乃果也
これをいさぶらうしるかるにさくらのこころをえ
と弟の僧都乃文りそいとうきてさりしもちろ
よ文僧都にくといつこれそやしく風へしとこ
なり

ちかのうかるるるいの　小弟や
羌　是　白氏文集
ろうぶさうしいそうれた
菓座　四座や
四座ものり

やうそいさうくるもくこれハ僧都ハ乃法しかといへて
蓋ものそこれくくしくあるこきるもるすと僧都のく法
しと童のいく初せ　仕りるくハの紛
私法弟と童と兄弟れ事ハ蓋乃始るくいの志るを法
と僧都といへ風ハ用ものあり

入道乃姫君乃れるいよ
法弟とさしくいつり　僧都乃文のあて弟
名ろうたまり　僧都の名
僧都乃文れさあやたしふきるる弟
いとしくかるくおるくく
法弟乃心や
るよかうりるるるしたるれといとるて心
らしのくれるりのれ文をうれた
芝い花乃初や文をとる蓋のるる
けさるよ大羽殿乃れ
文の初　手紙
僧都乃文ハ物の様りそうきてるくハふこるせ文
されけさといへる
ハあり夜るるるといる
蓋乃るるくるるよるれるるを志りて問ものいしる
ありれるにるるや

えりてハ仏乃せめをよへ
菩乃執心をとめくる結ぶれむきてるものをくふり
えりて飛とるんとや
いくハちん
ちんくいるゝ　ちゝやなといふなり
とのにちきりあやまち結そあいくふのつをとる
けまくうてハ菩の執をるへくもものくれ愛よ
ゆち愛執の飛とワる色とや
一日より出家のくくハ
心地観経曰若善男子及善女人發阿耨多羅三藐三
菩提心一日一夜出家修道二百万劫不墮悪趣常生善
處受勝妙樂遇善知識永不退轉得値諸佛受
菩提記坐金剛座成正覚道
一日一夜出家乃功徳をえりてハ
やされた又菩乃心よしくふの結とくこ心
ゆくのませをん

菩とものくくハ知りあふとくくの出家乃功徳ハ
むゆくくくすとくのを結へとも
とくくくく
秘　如来ハまりてとくくとも
とくくくくハトゝり感
まくくくとあくくとあくくあ
法華の心よくあよ見くまやくれと何とものを結事
ゆけまくくを表ゆくくの心
この表いくれよりおもすりんん
愛　ゆくくの法華のくあいくやくれ人とくこに表乃初
とくくくくり
をくくこ反よくむきてくを結へハ
外横　法華の拝せ
とくを世とゆるゆくり
別とゆきんとちくくせ
あやにくくよおゆくて

蓋のあさるりしに間のすゝ
うちみしとき
宗信や　秘
なりいたると夏のやうなり
秘　夏乃字三　義
とんこのうへ
義　蓋るものはしをちがへれのやうの人乃ふんといふこゝ
はそうちわりこ信乃
秘　宗長の俳諧　義
尼乃の初句へ
なにとしに世よりわる拙うも
宗永の中や　秘　宗永の初トアリ第
こりうたゝなく
ちり俗ちさゆる心
けよりそあるもおりしかすんの
花　宗永乃尼乃ようこう信初や

拙しいとなく
義　蘭心とかすんこう拙といまはとや
あさましうちもんわりさ風
拙ようこ迷しに時のりゝ
たのしうやうこ
尼しわりのりやと
紀伊なる拙こりよう信
いれ、ちとさ風うさ風よ
義　紀伊なれ拙こりをたこう
程思ひ生こ迷風と
こ一人とこ信
宗永の女れりゝ心
ちぶや世よおこすんと
秘このこう
かれ人とし世よりの信
秘　母のこや

これ僧都の法師なる人
秘 意しのりて 紀
元つことなりきりと
紀 俗系うはあるぬやうよりのすゝめ（なり）
いとうくいまうれ
系 尼元の姿なや
秘 尼元れいなや
元 ゝといふ体うもあるうなまなく
紀 僧都ハ出家の体うもおゝしてをのれ（なり）は
のうなくのかいてんさしたる意へうゝとさんもと
ふいよりとや
おれやうゝゝゝされかとも
紀 意の事ゝゝへるとくいへやうとするかあるし
と法ゝるなや
木丁ゝゝいれうう
紀 量を篇体へしいなや

これをみしさうゝつ事と
何 さいやつれや　二説云さうき来つれもや
秘 さいやつ事と付説て用ゝ一説引ざ来つれゝや
私意の俗系れ事をしいゝゝ世ゝ事をさはかり
つ事とゝふや
まゝ伝れ説と
紀 ゝれ意の文せおよわゝゝ僧都乃文也意乃文
とハ世よりゝ事へきとゝ
おかつなゝ伝ゝうと
木丁ゝうなゝ世ゝもの結ゆいなゝ
ゝめていも
紀 ゝと世ゝゝゝ様の行ん
ゝやあるうゝ
何 警殺　私量をかしゝ殺
れ為をゝらんをゝきへか
俗系のゝゝよ　ゝいをとゝ用ゝるゝ尼元

げんさいのこと
頭陀人　又見所人
見隆人や　手
兄弟乃人やあるらの人心ふかき極悪とてを
義よ月
仏のまいせよ　れこれ何ともいふこと
尼公乃ふなり　とものいふと小さんよりてを
おさるもきいたとるしと
あるの童ものと什物使とあるこやあるまなら
ついとや
あるいてをおぶくしく
童の初や　秘
しとしくなとしやこ心を
このいをと人はてるて
童乃心をや
いとこりなり

花
童の初や

尼公のこと集や
木下れとまとしくせてれを
深井をしるや
とんいにねむちまれも
木下ごあれと深井のけものちきを童乃心を
こそあはりり
恋よ深井のるすも
いうりとこ法りこ
童の初心
かくうとくくうを
討面しるきを童の心こ
りときてみとてまつ
童のいを文を枝て尼公の深井乃みをを
あるしりこれいひて
りうをあもるや世の中をこるこれ紙乃とを
童のの中や　文引寸

かきわくる道いのよみかねまれ
紙乃音や あまりかろきてうりしさとしづかなといふ
もれぞのさし色ん
菓子比や

さ陶しよつきまりきれらうんふ僧都よ云ゆかし
白文かしるよ密迦の母いと云そ釆ちりまま
ふこよ云陶しとはいふ信律よ云ゆるしとは大悲大覚者
とそれの人此岩よいるす あるき銀者大士耳と是云を
きらるとあちしりもこ云る人しみるふとのしけん比
みる心とも志てそわに我とや先しめふいふちての
あれつきかる人しきれとも得しよて僧都よ対してゆるき
とのむかるつきん

信身い未

人めいいるよと
余承ゆしてきる人ハいるよかれとうしくうりんとや

かきてや了信分
文のさ陵れたどろよ見えしるあきてし
○法乃師とらわるを上志ろへそ云ハ叡山よ寿をまちよハ云那
法の師よ此をしれ僧都とハたのむつきよろしくいひけさる
事しまたのもしろきとや五文字とれ字よめつ乃しく面白
やせ
おもハ叡山ハよ〇てむるもとらしれかや
これ人ハ見や忘れ
うらいろりすや
り忠すきれるみ
紫ハ侍示の形見とぶふとや
くつくしとるき侶すさ夜の
けふとて侍示のふるか
九乃人しもあしねを夜を
ともありさ夜と紫にみけん事しいちしくなるる
しとともりふかや

かきもつ百人一首のしづのおだまき
紙の音や あまりかなまくらさとづるあといちり
とれそのさ〜ゑん
菓子地や
かわらたかつるとしの人
さらよきこてんらくなり〜
蓋の文字初や　花蓋
高〜よつをとき御ゆとう信都よこるゆ年
句のゆ又ゆ引ゆ人方とあもんとちり事あとなる
信都よ売して恨をあきわちり
あさもっ月一世の蓋うちをくたと
蓋屋や　蓋
わまるうちとうさ　紙
法乗寺蓋とさやうちわこつ人心ゆ
人ゆいうと
余ゆ〜てうんいうよりとうんとや

かきもや百人一首
文のさ後れとうよ月をとうしうる
法乗寺とうあるたとうそ心ゆ和山よ月をまるこ
法の師よきこれ信都とゆたのゆとつきよくこるけさ
事ゆたのうちうや五文字れ字あつ月く西
やや　蓋
かとうゆ山ゆてうとうしうゆ
二人ゆ月や忘れ
蓋うゆ月すや
り忘すされうみ
蓋ゆ法乗寺の月人とゆ人とや
うつ〜とうる結るさ後の
ゆ文とこて法乗寺の子人
九月人ゆ月ゆ後る
蓋とうあり月後と蓋ゆ月ん
〜ととうゆ月ゆ

ゆしくしうねぶい
法華乃てゝよおもうきと風や
いとしうねれあ世風
秋 尼 春れ心なり
いうきうん
秋 尼 春乃いつや
心ちのうさうるやうよ
法華乃和なり
いのかのちう義よう
秋 義五 義
をうう志体まわてやこ乃れ
ゝとゝ体そくうれあまれと言いてんを人ゝいんう
てうゝ世法ゝと
いろけちうあまんあさう
又と尼ますゝやうや
あまりちうねいうてまう人と つをさ世恋世風

何 公ちうんをいつをえうまゝ
つをあうたちゝや
法 法ゝいこやうをのうれんあ世ま世 何海流いうゝ世お
乃 作り
私花の花多ゝ
さうにうちりも
法華乃心や 芝ハさうてうう尼たと
あうれこれ春よ
秋 尼春や 義 叶春い意や
をのけうやあえすん
法永のうをうや
れうちうとに
義 出家のすや
心うをうき幸うを乃
義 意乃初んれをうをりうゝ
うう幸うや

ゝゝ又聊介よ出家せう所

日ころのしうちもくやしさせ
箋 浮舟の煩や
うき事をさまおもひしらるゝや
箋 薫なとの事にゆゑ浮舟乃心ののこるらむやと
いふなり
まさへそきぬ給へる志よしなるとかいふらむさせん
薫の詞や逢てすみすらむといふや
げなるといふ
尼君乃いふ
くだんとうつろはれと
秘 薫のいへる詞を写してみるや
口うけしのやうなるへし
しらくおかい行ゐふき風あはれ也
箋 尼君の浮舟の風をあはれみましたへ給へとせ
雲れりうふてらね
花抄 ふとなれ雲かりうしてある私の尋ねやうへいやうらん

私 花鳥川宗覚 箋
秘 川宗末勘や 公は横川は雲ふ山といへれと
比叡の山はさすそうてさかる所の事也山風はなをしく
ことおもしは言ふるに給へと小宰相といへるや
山風まとを
秘 山ふところ一字に心はおなしかるへし
箋 小野乃山や川宗を心ざし侍及川宗なり
弄 かへ山ふところを
そなたよりさん
箋 薫乃心や
私 浮舟乃対面かけまいはすゝむといへり
ゆうしきはれさ風
箋 浮舟を小君乃深心や
心ゆのまゝなる
箋 たとへしくゆかへやすまさるよしせ
いつわりとまちおいよるよ

秘
菫や
まさ敷しくやさしくなりと
箋
菫乃心や
人乃くしきへさかやあらんとわれ心乃あはれいはねさ
なくおとしあるはめつりしるしいはとれ
河
落置や
玉簪巻よおもしあふさきとある又総角巻のもすて
ううおとしときこそまつつまさんとあり此心
む
おとしハ人を　おとす心しやくしきへる人をとさ
きて此ハりしはいねりやと甜じすふい三ろかや
何海よ落道といへるあはれなり
弁
菫のくしすへき路しやさしく人乃よさきこそ
まつろんと云ふめくらしあるへ
秘
花る流いろりくしすてるへあるとや　菫け
佐よくしすへ路つるやうりくときころんとや
箋
菫の推量や　　秘ノ第三句し

おんちへ知る　　三本道遠自筆此詞ハ小書ニテイトアリ
秘
筆ハ此一話動身乃ききるといふよ志ちらしとて
むさしくと夏や何やのやうよ出てさてなりるや
のりあるといへる心やふかしろり来るうくさ風
凡そね夏乃さ風甚深微妙の執向と凡ら
箋
花ハ一部と動いろねと筆アラ凡ちる詞也なにある
と写しけるらしや　　但此詞あるハ夫なささにて
此詞をよまるる書や　おもしときこるすいはとれた
あるハ書きしける様や本よ傳ある事一アれとも
なるやこハ師説ことれとうるしるも未ハあらつるあし
又なよ傳ゐるもの又未ハあるへし　然ともなよりへ悠る
とよまるるの書や云し

奥云
此恩本求數多舊年跡之本抽攸是用捨短慮所及
雖有豚磨之志未及九牛之一毛井蛙之淺文寧及哉
只可招嘲哢燒雖有勘加事又是不足言未及尋得
以前依不慮此本披露於　遊迹門々戸々　寫
預誹謗ヲ雖仮恥無詮懲前事為卷奥所注付
僻案切出為別紙之間歌ホ多切失〻〻旁難堪恥
辱之外無他向後可停止他見

私云此奥書有啓字僻字ホ未證本退可紀ニ〻

非人棄門明静

河海抄奥書云
此抄一部丈巻〻〻自令校合加覆勘
牛可為治定〻〻此本一要

儀同三司源判　松ヵ〻作者善成ニ七

花鳥餘情奥書云
恩應仁〻乱初避上都暫寓九條〻坊因敦〻秋重
赴南京纔卜十ヲ〻〻地尓来已歴五愁寅宣感双蓬
髪遂倒之餘功丈之眼忘白樂天世俗文字之過玩紫
式部源氏物語之詞偏〻通至教〻命脉句〻貫和
歌〻骨髄於是為觀覧智新月盛澤培今是昨
非遂挹河海之流盡真源於心底袖促花鳥使矢
餘情於毫端也月文明四年竜集壬辰除月上澣
桃花居士七十一歳誌要

手花云
文明廿八仲夏初九入眼畢
從同年七月中旬迄　落字　上旬見合物語本

同九年二月重加點し　私云合点略し肖柏
進覧書　初中ノ清十四年
長享三年季春中八於種玉受巻主説合点し
一答トハ文明廿九宗祇法師ホし不変同意深恩ヲ
強固答ヤ　肖柏答ヤ
一勘トハ文明十二度子季春肖柏尋中　禪閤
条々心彼自筆被任付　勘我合点ホヤ自桐壺至若
葉下ニ不相違同類ホヤ
心ヒ西向答花名未逐一決しホんの彼ホし内不変
私今所存ホし　右件　西向答并進而中書ホ書ホ書一ホ
云我し童稚し不変童説ホ雖云ヒ任ホ写重者

右肖柏老人覧書備請し六月廿七日立筆連々忘忙
八月十七日終其功七冊調し　静加一見一法云し抄也
永正七年記し　又云　正御判　道遥院ヤ
ホ抄云六月下旬立筆今日終書功調ヒ為七冊ニ他

見而已
永正廿七　八月十七日　三条西　入道前内大臣　ヒ道遥也
三抄奥書云
ホ覧書　自趣任夢伝橋奥抄　胸臆荒涼し淡章ホ所注置不
可儒脱し如然別　刺史義紙数高深切し餘高紙愚
堅し間不薩上書全部以附与しこ奏ニ印加一見ヒ
狂宜令取捨不可被ホ深忘し外而已
大永戊子夏五下旬候　老比丘御判　道遥院内府ヤ
同重奥書云　稱名院右府也
以抄胸臆し談　公條卿章ホし覧書ヤ達先年紙別
刺史し聴高紙愚堅不薩上ホし如不慮し失失
却ヒ念し中立而来命し間終書　切ニ一見ホ深
老筆ヒ覧ニ可被禁他見而已
天文甲午暦冬至日　八旬老袖判　同上

年立奥書云

源氏物語年立一冊者故禪定院下野製作也件正本
應仁大乱於桃坊文庫為白波被奪取年変紛十年
下愚感得し悼無物于取喩什一怙以彼真本如書写
者也未流布世間雖云忘外感数寄し志付嘱尤金
五訖深秘箱底莫令他見

永正七載季夏中吉

前博陸嗣仰判 後成恩寺殿忠基 一条殿冬良公也

此光源氏物語者年朝風俗翫之為吟風
弄月〻捉筆矣余先是時〻雖陪三光院
内府講筵不能畢功於全部以為遺憾
委而彼謄写河海花鳥餘情弄花抄〻
諸抄並以其繁多而不便一覧雖校正〻
期於故一至微臣〻別未脱仕宦羅網南
去北来云得閑暇寔思而止而已矣茲要
也是斬主素茲老人以余有識刹〻素
避(逐)故隱陋邦毋之後別老人也種姓不允
丁識高明寔一時名流也(哲)加旃親矣
三光内府勅侍講惟寔比物語〻奥旨

依之就老人求果余素願於是老人忽感
其志考之諸册繁有莫訛者正欲右
補互有得失者兩存之十稔之間雪纂露
册畢五十五帖可謂集大成也乃題以泯江入
楚矣古云墨泰山硯楚江紙乾坤令併案此
册豈多讓哉此所謂入楚亡庶者老人之硯
隔者也

嵩慶長弁三歲丁巳戊星夕之日誌畫

嵩齋史玄旨判